
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

「アジア・アフリカ地理言語学研究」令和3(2021)年度第1回研究会

日時：令和3年9月4日(土) 9:00-16:15, 9月5日(日) 9:00-17:15

場所：オンライン

使用言語：英語

本プロジェクトは一貫して新学術領域「ヤポネシアゲノム」言語班と共催し、これまでの二回の研究集会でも遺伝学者に発表してもらっているが、今回は特に動物語彙を取り上げ、「ヤポネシアゲノム」の動植物ゲノム班とも共催し、ネズミ・クマ・イヌ・オオカミ・ウマ・ニワトリのゲノムの専門家にアジアないしより広い範囲における地理分布と系譜について発表していただいた：

Hitoshi SUZUKI (Hokkaido University)

“Human impacts on the evolution of rats and mice”

Ryuichi MASUDA (Hokkaido University)

“Phylogeography of brown bears in the northern hemisphere”

Yohey TERAJ (The Graduate University of Advanced Studies, SOKENDAI)

“The evolutionary process of dogs domesticated from gray wolves”

Teruaki TOZAKI (Genetic Analysis Department, Laboratory of Racing Chemistry, Japan)

“Genetic diversity and relationships among European, Asian and Japanese horse breeds”

Takahiro YONEZAWA (Tokyo University of Agriculture)

“Origin and history of Japanese native chickens as inferred from the mitochondria DNA analysis”

その後アジア・アフリカ諸語族におけるこれら6つの語についての発表が続き、活発な交流が行われた。以下は各人による要旨である：

Kohei NAKAZAWA (The University of Tokyo), Akiko YOKOYAMA (JSPS/ILCAA, TUFUS)

“Animal vocabulary in Japonic”

ネズミ：ネズミの語形は NEZUMI 系が日本と奄美、OYA(BITO)系が奄美より南の地域に分布する。他に YOMONO 系が本土のいくつかの地点と琉球にまとまって見られ YOME 系も本土と琉球に点在する。他には OYAKE、CYUUCYUU、FUKU(RO)などが見られる。

OYA(BITO)は「親人」で、YOME「嫁」と同様にネズミを家族に喩えた表現である。YOMONOは「夜物」の意味で、ネズミに限らず夜に活動する動物一般を表す。CYUUCYUU、KAAKIIは鳴き声に由来すると思われる。NEZUMI以外の形式は二次的に生じた形式であり、NEZUMIがJaponicでのネズミを表す最も古い形式と推定する。

十二支で mouse にあたる Japonic の語は NE であり、NEZUMI と NE のどちらが古いかは明らかでない。しかし、NE は NORANE のように古くから複合語を作るほか、YAMANE、KITSUNE のような他の動物の名前にも含まれ、小動物を表す形態素として、古くからあったと考えられる。これはさらにタイ語の nũu を含め、東アジアに再建される形式と起源を同じくするかもしれない。

クマ：クマの語形は殆どが KUMA だが、SISI と KUMANOSISI が東北地方にある。琉球語には、クマに対応する形式は殆どない。

KUMA はもともとツキノワグマを指し、ヒグマはシグマ（後のヒグマ）と呼ばれ、形態素 KUMA が含まれている。SISI は、獣や肉を意味する言葉であり、野生で食べられる野生動物を指すと考えられる。クマが SISI または KUMANOSISI と呼ばれる地域では、INOSISI「イノシシ」やKANOSISI「鹿」などと同様に、クマが典型的な食用動物だったために、名付けられたのだろう。日琉語族には、KUMA 以外にクマの形式はない。

ウマ：ウマの語形は UMA 系が Japonic 全体に分布する。他に、宮古に NOUMA が分布し、他に DA(UMA)、DOODOO などが見られる。宮古に見られる NOUMA「野馬」は野生の馬の意味だろう。DA は漢語の「馱」で、荷物を負わせることで、荷物を運ぶ馬の意味である。DOODOO は馬を制御するときの掛け声で、それ自体が馬を指すように転じたものである。

馬を指す語では、雄馬に KOMA や GANZYOO、雌馬に DAMA や ZOOYAKU、子馬に TOONENGO や TOOZAI などが見られる。KOMA は子馬から意味が転じたものである。GANZYOO は「五調（名馬のための5つの条件）」などの漢語に由来すると思われる。雌馬の DAMA は「馱馬」で、雌馬が荷物を負う役割を担ったためである。ZOOYAKU は「雑役」で、種々の雑多な用、雑役に雌馬を使ったことに由来する。子馬の TOONENGO、TOOZAI は「当年」の意味で、主にその年に生まれた子馬を指す。いずれの表現も用途などに基づいた分析的な表現であり UMA が「馬」を指す Japonic の古い形式であることは疑いない。

UMA は中国語 ma やモンゴル語 mori、朝鮮語 mar などの大陸に見られる形式からの借用語だろう。直接的には中国語からの借用語と思われるが、Japonic では語頭に母音を伴っている。母音の添加は ume「梅」にも見られることから、中国語の m-が Japonic の話者には um-のように聞こえたのかもしれない。

イヌ：イヌの語形は、INU や INUKO などの INU タイプが日本本土や琉球で広く見られ、KAAKAA, KOOKOO, WAUWAU などもある。

INUKO の KO は指小辞である。KAAKAA, KOOKOO, WAUWAU はいずれも鳴き声か

ら転じたものだろう。INU 自体も元来は鳴き声に由来するのかもしれない。

オオカミ：オオカミは OOKAMI, OOINU, YAMAINU などの形式が見られ、琉球にはほとんど形式が見られない。

OOKAMI, OOINU, YAMAINU は、いずれも「大神」、「大犬」、「山犬」と分析できる形式であり、新たに作られた語だろう。人間に身近な「犬」に対し、野生の犬あるいは敬って大犬、さらに大神と呼んだと考えられる。もしくは、江戸時代に洋犬を表す KAME という形式があることから、イヌを指す kami という形式があった可能性も考える必要があるかもしれない。琉球には狼がないため、オオカミにあたる語も基本的に見られない。

ニワトリ：ニワトリの語形は TORI が最も広く見られ、NIWATORI が次いで分布するほか、KAKE 系もいくらか分布する。

TORI は本来「鳥」一般をさす語だが、やがて家畜として最も身近なニワトリを指すようになったものと思われる。NIWATORI は「庭の鳥」の意味で、飼っている鳥を指す。

鶏の古語は KAKE であるが、諸方言に見られる KAKE は古語の継承というより、鳴き声をもとに各地で作られた形式と思われる。

Rei FUKUI (The University of Tokyo)

“Animal vocabulary in Korean”

韓国語における今回の共通テーマの動物語彙は、次のようになる。

現代語（ソウル方言）：

鼠 *cwi*, 熊 *ko:m*, 馬 *mar*, 狼 *iri/nikte*, 犬 *ke:*, 鶏 *tark*

中世語（15 世紀）：

鼠 *cuj* (H), 熊 *ko:m* (R), 馬 *mar* (L), 狼 *irhi* (H-), 犬 *ke:* (R), 鶏 *tark* (L)

現代語と中世語の違いは、「狼」に新しく *nikte* という語形が加わった点を除けば、ほとんど同じである。また、方言差もあまりない。これらの語形のうちで、「熊」「馬」「鶏」については周辺の諸言語との関係がしばしばとりあげられてきた。

Kenji YAGI (Kokushikan University)

“Animal vocabulary in Sinitic”

本発表は中国語方言におけるネズミ・クマ・ウマ・イヌ・ニワトリの分布について報告した。

ネズミを示す語は A：鼠・老鼠、B：耗子、C：[k-]を語頭子音に持つ音節を有するグループ、その他に分類される。A タイプは中国全土に分布が広がり、B タイプは北方方言を中心に広く分布する。

クマを示す語は、「熊」を有する語形が広く分布するが、その他にも「狗」「瞎」「黒」「人」「婆・母」「老」などを含む語形が見られる。語頭を中心に整理すると、A：熊～、B：狗～、C：黒、D：人～、E：老～、F：[k-]～、G：その他に分類される。

ウマを示す語は、単音節の「馬」が全国に広く分布している。それ以外には「馬」に「子」

「児」といった接尾辞が付加された語形が分散的に見られる。

イヌを示す語は A：犬と B：狗に大きく分けられる。A タイプは福建省など南方に分布が見られる。B タイプは全国に分布し、「子」「児」といった接尾辞が付加された語形も見られる。

ニワトリを示す語は単音節の「鷄」が全国に広く分布し、「子」「児」といった接尾辞が付加される場合もある。修飾成分が前置される語形も少数見られる。

Chikako ONO (ILCAA Joint Researcher, Hokkai-Gakuen University)

“Animal vocabulary in Chukotko-Kamchatkan”

要旨未着

Mika FUKAZAWA (ILCAA Joint Researcher, National Ainu Museum)

“Animal vocabulary in Ainu”

アイヌ語でイヌを表す語彙は一様分布であり、音韻的な区別として下位分類される。また、ネズミを表す語彙も一様分布であるが、種によって区別した語彙も持っている。オオカミは 2 タイプに分かれるということを示した。ウマを表す語彙は日本語とロシア語からの借用である。また、ニワトリを表す語彙は日本語からの借用、もしくはアイヌ語の「鳥」を表す語彙を使う複数のタイプで表現される。クマを表す語彙は非常に多く、ここでは 1 歳程度の仔グマと、4 歳以上の雌グマ、雄グマの語彙について方言差を示した。

Yoshio SAITO (Takushoku University)

“Animal vocabulary in Mongolic and Turkic”

扱ったどの動物名もモンゴル系の言語では変異が少ないが、テュルク系の言語では「馬」を除いて複数の顕著に異なる語が使用されている。両語族間では「鷄」を意味する語のみが同源であるが、西アジアのテュルク語では「雄鷄」にはイラン系の語が使われ、「鷄」を表す本来の語は「雌鷄」を意味する語となっている。シベリア東部のテュルク語ではロシア語から入った語を使用する。「熊」については、中国のモンゴル語では中国語からの翻訳借用と考えられる語が、シベリアのテュルク諸言語では「老人」を意味する語が使われる。「狼」と「犬」はどちらの語族の言語でも区別される。

Satoko SHIRAI (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokyo)

“Grammatical Relations in Asian and African Languages: Summary of the last meeting”

本発表では、前回会合でアジア・アフリカ諸言語の文法関係に関して発表・議論された内容を総括した。まず、規定稿における分析対象と分類基準について確認した。その上で、各地域・語族に見られる文法関係標示パターンの概要をまとめた。さらに、地域的分布の概要を

示し、能格タイプや無標示タイプの分布傾向を指摘した。

Shiho EBIHARA (ILCAA Fellow), Kazue IWASA (ILCAA Joint Researcher, Nagoya University of Foreign Studies), Keita KURABE (ILCAA), Satoko SHIRAI (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokyo), and Hiroyuki SUZUKI (ILCAA Joint Researcher, Fudan University)

“Animal vocabulary in Tibeto-Burman”

チベット=ビルマ諸語における、動物語彙 6 項目（「馬」、「熊」、「鶏」、「ネズミ」、「犬」、「狼」）の語形と地理的な分布について海老原が発表を行った。「馬」については、PTB の祖形である *s/m-raŋ が優勢であるものの、それとは由来の異なる *r-ta とい PTB の祖形がチベット諸語に共通して広く見られることがわかった。「熊」に関しては、ラフ語の一部の方言において、「熊」の語根が失われて接辞のみが残った語形がみられ、忌み言葉と関係がある点を指摘した。また、ヒグマとツキノワグマの表現を区別する方言がチベット語圏北部にみられ、これが 2 種の熊のコンタクトゾーンと重なっている可能性を示した。「鶏」の語形には、本来的に「鶏」を指す祖形と、「鳥」を表す祖形がみられることがわかった。後者はチベット高原とチッタゴン丘陵地帯に分布しており、鶏の家禽化の遅れと関係する可能性を示した。「ネズミ」については、語形の種類が多いが借用語が少ないことを述べた。「犬」と「狼」はいずれの言語・方言でも区別して表現されているが、一部の祖形が共通していることがわかった。「狼」に関しては、語形が犬よりも多くみられることから忌み言葉との関係を指摘した。(文責：海老原志穂)

Atsuko UTSUMI (Meisei University)

“Animal vocabulary in Austronesian”

オーストロネシア語族における動物に関する語彙は、それぞれの動物の分布によって異なる様相を見せる。「ニワトリ」「イヌ」「ネズミ」はどこにでも分布しており、特に「ニワトリ」は重要な家畜である。これらの語彙に関しては、様々な語形が存在し、古くから幅広く分布していたことが推察される。それに対し、「クマ」は台湾やスマトラ島などの比較的大きな島とマレーシア半島など大陸につながる地域にのみ分布しており、オセアニア諸語のほとんどにおいてはヨーロッパの言語からの借用語を使用する。「ウマ」も同様に、オセアニア諸語のほとんどで、フランス語由来あるいは英語由来の借用語が使用される。

Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University), Aika TOMITA (Osaka Shoin Women's University), Ayaka HIRANO (Osaka University)

“Animal vocabulary in Kra-Dai”

Kra-Dai 語族では Kra 語派と Li 語派とそれ以外の Tai 語派などで異なる語彙となることが多く、今回とりあげた動物語彙でもそのパターンがほぼ当てはまった。まず「馬」は、Tai

語派などでは ma A 系となり中国語など東アジアの Wanderwort と同じ語形を示すが、Kra と Li では ka 系, ni 系, vunhung など由来の分からない語が散在している。「鶏」は Kra のみ laq, liq のような語が見られ、それ以外は kai A 系であった。「熊」は全体的には(h)mi A 系が優勢で、漢語からの借用語も散在し、Kra ではやはり散発的に別の語が現れた。「犬」は(h)ma が最多だが、他にも様々な語形が見られる。「狼」は ma+nai, (dog + wild) のように「野生の犬」として表現するタイプが最多だが、漢語からの借用語や他の語形も現れる。「鼠」の方言量が最も多く、nu の他に数多くの語が見られる。布依語など北部では周辺分布が認められ、外側から nai > vau > la, na の順序で新語形が現れたものと推定される。鼠は日常的に接する機会の多い小動物であるためこのような多数の新語形が生み出されるに至ったものと思われる。

Masaaki SHIMIZU (ILCAA Joint Researcher, Osaka University), Makoto MINEGISHI (ILCAA)

“Animal vocabulary in Austroasiatic”

要旨未着

Yoshihisa TAGUCHI (Chiba University)

“Animal vocabulary in Hmong-Mien”

要旨未着

Noboru YOSHIOKA (ILCAA Joint Researcher, National Museum of Ethnology)

“Animal vocabulary in South Asia”

インド・ヨーロッパ語族（インド・アーリヤ語派、ヌーリスタン語派）、アンダマン語族、ならびに4つの系統的孤立語に関して、ネズミ、クマ、ウマ、オオカミ、イヌ、ニワトリの語彙を、それぞれ（推定される）語源に基づいてタイプ分類して、地理的分布を見た。各語彙それぞれのパターンを見た結果として、全体の分布的特徴を言えば、①中央部 vs. 周縁部（北部山岳地帯と南部島嶼部）という分布になっている語彙と、東西対立分布（東経75度辺りが境界）になっている語彙とがあること、②インド西海岸が、やや特異な傾向を示す地域として、南のドラヴィダ語族や孤立語のニハーリー語との共通語彙を持ちやすいことなどが分かった。更に、語彙間の対比をすると、③オオカミとクマとの間で意味の入れ替わりが起きたり、④イヌとクマが「茶色い動物」として同源の表現を持つことがあったり、⑤ニワトリ、イヌ、ネズミが擬音語由来のものがあったりといった特徴も見出せた。⑥ニワトリ以外は、インド・ヨーロッパ祖語にまで遡れる単語が出揃い、その時期に既にそれらが、身近な動物として認識されていたと考えられることも指摘した。

Nozomi KODAMA (ILCAA Joint Researcher, Kumamoto University)

“Animal vocabulary in Dravidian”

分布を比較した「鼠」「熊」「犬」「鶏」「馬」のうち、「馬」を除く4語については祖形を継承するとみられる語形が広く分布している。もっとも分布が広い祖語継承形は「鼠」であり、借用語による語彙の入れ替えの多いブラフイー語でも継承形が保持されている。「熊」については、祖語継承形のほかに、「黒い」に由来すると見られる改新語形が一部に見られ、タブーによる語彙の入れ替えの可能性があることを論じた。南アジアへの移入時期とその時点でのドラヴィダ語の分布との関係が問題になる「馬」については、インド・アーリヤ語の改新語形との関連で解釈上の問題があることを述べた。

Takamasa IWASAKI (ILCAA Joint Researcher, JSPS/ Kyoto University)

“Animal vocabulary in Iranian”

ネズミ：パミール諸語を除くほとんどの言語が印欧祖語 **mūs*-「ネズミ」に遡る語源をもつ。ロタシズムを起こしている言語も散見される。パミール諸語では「灰色」に由来する語を用いる。カスピ海沿岸の言語やアフガニスタンの周辺部では *gal*- タイプの語が見られる。以上のタイプの語形に指小辞を付けた語形も見られる。

熊：ほとんどの言語で印欧語 **h₂rtkos* 「熊」に由来する語が用いられる。ルシヤン語やイドガゴなど、借用語（ペルシア語 *xirs* から）と本来語が共存している言語も多い。またクムザール語ではアラビア語からの借用語 *dubb*、バローチ語、ワヒー語、バローチ語では語源不明の形態が観察される。

馬：パミール諸語の多くとオセツト語を除いた言語は印欧祖語 **ek^wos* に由来する形態を有する。ムンジ・イドガ語を除くパミール諸語では **bāraka*-「原義：乗り物」に由来する語をもつ。オセツト語ではコーカサスのナフ諸語と比較される語形 *bæx* が用いられ、印欧祖語の「馬」を意味していた語は *jafs* 「雌馬」への意味範囲の狭化が起こっている。

狼：ほぼ全ての言語で印欧語に由来する **ylk^wos* 「狼」を用いる。その他に、パシュトー語の *levá* < OIr. **daivya*- 「悪魔の」に由来する語形や、「狩人」を原義とするオルムリ語の *dâmi* などが見られる。また、ワヒー語、サリコル語ではダルド諸語からの借用語が、クムザール語ではアラビア語からの借用語が見られる。

犬：イランを中心に幅広く分布している **kuon*- 系とパミールやバローチスタンなど、イラン語圏の周縁部で多く観察される **kuta*- 系が多数を占める。これらに指小辞を加えた語形も散見される。少数派としては、ムンジ・イドガ語で観察されるイラン祖語の **gadūa*- 「(ある種の) 犬」に由来する語や、**kuta*- と関係する可能性のある *tuta* がゴーラニー語に見られる。

鶏：雌雄で異なる形態素を用いるものが多く、総称は雌鶏と同形である言語も多い。雄鶏をあらわす形式は様々な語源に由来する形式が観察される。鳴き声に由来すると思われる

語だけでなく、「朝」に由来する語等が見られる。

26. Youichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher, TUFS)

“Animal vocabulary in Semitic”

セム諸語で、熊、犬、狼は、グループを越えて同源語を使っている。熊の祖形は d-b 型であったが、アラビア語とアラム語では d-b-b 型として 3 子音語根になった。鼠、馬、鶏はグループごとに異なり、またセム諸語で最大の分布をなすアラビア語の中でも異なる語彙を使っている例がある。

Shuichiro NAKAO (ILCAA Joint Researcher, Osaka University)

“Animal vocabulary in Nilo-Saharan”

本発表では、ナイル・サハラ語族における動物語彙についての概観を述べた。「クマ」は実質的にアフリカ大陸に存在しない動物であり、「オオカミ」は恐らくジャッカルなどとの混同により語彙記録がほぼ存在しない。「ネズミ」は同源語がほぼみつからない。「ニワトリ」には KOKOR のようなオノマトペらしき同源語以外はみつからない。「イヌ」はゆるやかな類似性が見られるが、単一の祖形が立てられる段階ではない。「ウマ」および「ロバ」については、同源語がナイル・サハラ語族分布域の広域に分布しており、*m(b)urta「ウマ」、*kaj「ロバ」のような祖形が建てられそうである。*kaj については「ロバ」から「ウマ」への意味変化の例も見られる。

Daisuke SHINAGAWA (ILCAA), Junko KOMORI (ILCAA Joint Researcher, Osaka University)

“Animal vocabulary in Bantu: A tentative survey on selected animal names with a special focus on Eastern Bantu languages”

本発表では、基礎的な動物語彙としての「鶏」、「犬」、「馬」、「ねずみ」、「豚」を指す語形式の、バントゥ諸語における地理的分布に関する予備的な調査の結果を報告した。調査に用いたデータソースは主に次の2点である；i) Guthrie (1967-71) のいわゆる Comparative Series, ii) バントゥ語学者 Derek Nurse と Gérard Philippson が 1970 年代に行った語彙調査の集成である Tanzanian Language Survey [<http://www.cbold.ish-lyon.cnrs.fr/Docs/TLInfo.html>]. 前者からはバントゥ諸語のすべてのゾーンをカバーする 64 言語のデータを、後者からは東バントゥ諸語に属する 122 言語のデータを収集した。

分布の結果は次のようにまとめられる。「犬」と「馬」に関しては、単一の原形 (etymon) に遡りうる形式の全域的な分布が確認された。ただし、「犬」がバントゥ祖語 *-bu à(これはさらにニジェール・コンゴレベルの祖形に遡れる可能性が先行研究において示唆されている) に由来するのに対し、「馬」の方は、とくに東バントゥではアラビア語系借用語の *farasi* に相当する形式が用いられている。「ねずみ」は、バントゥ祖語段階において 5 つの形式が

再建されており、共時的な分布を見てもそれらがかなり広範囲に分布していることが確認される。この事実は、アフリカにおけるネズミのジェネティックな多様性に呼応している可能性もあり、さらなる学際的調査の意義を示唆する。一方、「鶏」と「豚」は、いずれも西部の一部の地理的ゾーンとそれ以外という二項対立的分布が確認された。「鶏」に関しては、バントゥ諸語の祖地と推定される北西地域の限られたゾーン（いわゆる Guthrie zone の A と B と C の一部）とそれ以外という形の分布であるのに対し、「豚」は西部の広範囲な地域（同じく A, B, C, H, K, L）とそれ以外という分布が確認された。ここ数年で急激な理解の進展があったバントゥ諸語分岐史の知見を照らし合わせると、前者はバントゥ諸語の分岐の早い段階で形式変化が生じたと見られるのに対し、後者については分岐の比較的遅い段階での形式変化と見られる。

予備的調査ではあったものの、このような形でいずれも異なったパターンの地理的分布が確認されたのは有意義な結果であると評価できる一方、より詳細かつ学際的な調査によって、これらのシナリオの妥当性に関する検討が待たれる。

Kimihiko KIMURA (ILCAA Joint Researcher, TUFUS), Hiroshi NAKAGAWA (ILCAA Joint Researcher, TUFUS)

“Animal vocabulary in the Kalahari Basin Area”

本発表では、カラハリ言語帯の 3 語族の 15 の標本言語に見られる「ニワトリ」、「イヌ」、「ネズミ」を表す動物語彙の地理的分布について観察した。同根の語形ごとにタイプ分けを行った結果、「ニワトリ」に 5 タイプ、「イヌ」に 7 タイプ、「ネズミ」に 7 タイプを認めることができた。各語族内に複数のタイプが観察される。語族を横断して分布するのは「ニワトリ」の 1 タイプのみで、このタイプの語形は周辺のバントゥー語族の言語からの借用であり、起源は共通である。